

令和3年～4年度国立特別支援教育総合研究所重点課題研究 ICT等を活用した障害のある児童生徒の指導・支援に関する研究

背景:GIGA スクール構想による ICT 環境の拡充 -1人1台端末の整備-

GIGA スクール構想は「全ての人にグローバルで革新的な入口を」(Global and Innovation Gateway for All)と謳われており、そこでは多様な子供たち(特別な支援を必要とする子供を含む)を誰一人取り残すことなく、資質・能力を一層確実に育成できる教育 ICT 環境の実現を目指している。全ての教員に求められるものであり、学校全体として ICT 活用の推進に向けて取り組むための知見の提供が必要であると考えられた。

- 先行研究や市販の参考図書などのレビュー

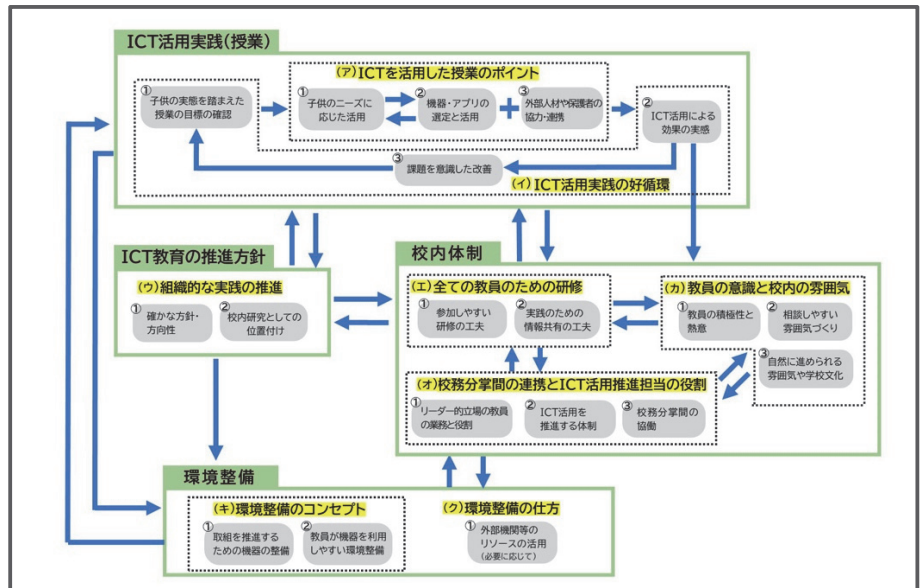
事例紹介は多くある一方で、学校における取組の進め方についての情報が殆ど紹介されていない

研究の成果

○ICT 活用を推進するためのプロセスモデルの提案

研究協力機関である青森県の全ての特別支援学校に配置された「ICT 活用教育推進リーダー」の意見等から「ICT 活用の推進に向けた 10 の視点」を抽出

全国の都道府県教育委員会から、1人1台端末環境下において特色ある ICT 活用の取組の推薦を得て、上記の視点を踏まえた聞き取り調査を実施した上で質的分析方法によりプロセスモデルを提案



ICT 活用を推進するためのプロセスモデルの提案

○ガイドブックの作成

『特別支援教育における ICT を活用した教育を推進するために 推進ガイド【特別支援学校編】』を作成



推進ガイド

1. 自校の状況把握		2. 自校のICT活用推進に向けた重点的取組と方	
大項目	中項目	小項目	達成状況
ICT活用実践(授業)	① ICTを活用した授業のポイント	① 子供のコースに応じた活用	達成状況
	② ICT活用実践の好循環	② 機器・アプリの選定と活用	達成状況
	ICT教育の推進方針	③ 外部人材や保護者の協力・連携	達成状況
		④ 子供の実際の様子をもとにした授業の目標の確認	達成状況
校内体制	⑤ ICT活用による効果の実感	⑤ 課題を認識した改善	達成状況
	⑥ 組織的な実践の推進	⑥ 確かな方針・方向性	達成状況
	⑦ 全ての教員のための研修	⑦ 校内研究としての位置付け	達成状況
	⑧ 校務分掌間の連携とICT活用推進担当の役割	⑧ 参加しやすい研修の工夫	達成状況
環境整備	⑨ 教員の意識と校内の雰囲気	⑨ 実践のための情報共有の工夫	達成状況
	⑩ 相談しやすい雰囲気づくり	⑩ リーダー的立場の教員の業務と役割	達成状況
	⑪ 自然に進められる雰囲気や学校文化	⑪ ICT活用を推進する体制	達成状況
	⑫ 環境整備の仕方	⑫ 校務分掌間の協働	達成状況

○活用について

- 複数人でチェックを付け、重点的に取り組む優先順位や具体的な方策を協議
- 先進的に取り組んでいる学校のアイデアや工夫をヒントに
- 都道府県教育委員会で ICT 活用推進のための指導助言や必要な施策を自治体で検討する際の状況の把握の参考に

②相談しやすい雰囲気づくり

計画から実践までサポート

機器を使用する場合には、計画段階から情報部のメンバーが身近にいて、こんな機器がある、こんなふうに使えんことを伝え広めています。実際の授業にも、情報部がついて行くなど支援を行なっています。

相談シート等の活用

ICT活用相談シートを作って、困っていることがあれば提出してもらっています。出された相談には、しっかりと時間を取って対応しています。

[重点課題研究]

ICT 等を活用した障害のある児童生徒の指導・支援に関する研究

(令和3年度～4年度)

【研究代表者】棟方 哲弥

【要旨】

本研究では、GIGA スクール構想により端末等の整備が進む中、学校現場に ICT 活用の推進に必要な知見を提供するため、全国の都道府県教育委員会に依頼して、ICT 活用に先進的に取り組んでいる学校の情報を得て対象を選定し、それらの学校がどのようにして先進校となることができたのか、そこで行われてきた実践の特色や成果についての調査をし質的分析を行うことで、そのプロセスモデルを明らかにした上で特別支援学校における ICT 等を活用した障害のある子供の指導・支援を推進するための取組に関するガイドブックを作成した。ガイドブックは、学校の管理職、校内の ICT 活用を推進するリーダー的立場の教員を中心に、自校の長所、強み、特徴と課題を把握した上で、学校で重点的に取り組む必要のあることがらを把握するためのチェックリストと先進校の具体的な取組のエッセンスを参考にしながら、読み手が自校に応じた具体的な方策を検討できるように工夫している。

【キーワード】

GIGA スクール構想、特別支援学校、ICT 活用教育、KJ 法、ガイドブック

令和5年3月



独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

National Institute of Special Needs Education

【背景・目的】

GIGA スクール構想では「全ての人にグローバルで革新的な入口を」(Global and Innovation Gateway for All)と謳われており、そこでは多様な子供たち(特別な支援を必要とする子供を含む)を誰一人取り残すこと無く、資質・能力を一層確実に育成できる教育 ICT 環境の実現が目指されている。全ての学校で ICT 環境が格段に拡充されるため、ICT 活用による指導内容の充実や障害者の社会参画の促進への寄与が、より一層期待されている。また教師が ICT 環境や先端技術を効果的に活用することにより、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実、並びに子供への支援の充実が可能になると期待されている。

- 本研究では、先行研究や先進的な学校事例から情報を収集し、分析するとともに、研究協力機関を委嘱して、新しい ICT 活用の実践、ICT 活用を担う専門性のある教師の育成や教員支援の在り方について整理する。それらの知見をガイドブックにまとめ、提供することで、全ての学校において期待されている 1 人 1 台端末環境における ICT を活用した効果的な特別支援教育の実践が円滑に行われることに寄与することを目的とする。

【方法】

(1) ICT 活用の推進のために必要となる視点の検討

研究協力機関である青森県教育委員会が県下の全ての特別支援学校に配置した「ICT 活用教育推進リーダー」から得られた ICT 活用の推進に向けた視点を研究チームで整理し、KJ 法(川喜田, 1986 他)を参考として、小分類、中分類を整理する。これと並行して実施する先行研究等の知見と合わせて(2)の聞き取り調査の内容を検討する。

(2) ICT 活用を積極的に行なっている学校への聞き取り調査

全国の都道府県教育委員会から、1 人 1 台端末環境下において特色ある ICT 活用の取組を、特別支援学校、小中学校等、それぞれ、1 校(複数推薦も可能)の推薦を依頼する。推薦の得られた学校の中から校内体制の構築の状況等から聞き取り対象の絞り込みを行った上で聞き取り調査を実施する。

(3) 図解化(プロセスモデル)とガイドブックの作成

聞き取り内容を逐語テキスト化した上で、そのプロセスや実践の進め方を方法知として見出すため、多くの定性的データから統合的なイメージを生成する手法として開発された KJ 法(川喜田, 1986 他)を参考に、その基本となる一巡工程「狭義の KJ 法一ラウンド」を用いてカテゴリーの整理とプロセスの図解化を行う。このプロセスモデルと聞き取り調査のテキスト等にある具体的な内容をまとめガイドブックを作成する。

【結果と考察】

（１） ICT 活用の推進のために必要となる視点の検討

「ICT活用教育推進リーダー」を対象として、自校で「できていること」と「推進に向けた課題」についての意見を求め、そこで得られたテキストを切片（これが1つの事柄と判断できる文章の単位）に分けた。その結果、合計で460個の切片が得られた。その後、研究チームでKJ法を参考にした手法を用いてこれらを整理をしたところ、「教師の活用」とした内容が9カテゴリー、「児童生徒の活用」が9カテゴリー、「授業場面」が11カテゴリーに分類されて合計29カテゴリーが得られた。さらにカテゴリーを絞り込むことで10の大カテゴリーを得た。推進リーダーが挙げている学校におけるICT活用の実態を構成する「できていること」は「これまでICTを活用する上で、必要であるから取り組んできたこと」であり、現状でできていることと捉えること、「ICT活用の推進や導入に向けた課題」は「今はできていないが、今後必要だと考えていること」であると捉えて、この10の大カテゴリーを「ICT活用の推進に向けた必要な10の視点」としてまとめた。（具体的な内容は研究成果報告書 pp. 23-36 を参照）

（２） ICT 活用を積極的に行なっている学校への聞き取り調査

推薦の回答は23の都道府県より得た。内訳として小学校5校、小中一貫校1校、中学校2校、特別支援学校24校が推薦された。その中から、特に、校内体制の充実が認められる学校を選定し、聞き取り調査を実施した。聞き取り調査は、本研究所の倫理審査を経て実施した。「オンラインによる訪問教育」「オンラインによる画像・動画データの保護者への提供」「プログラミング教育」「学校及び家庭における支援機器活用」「遠隔プレゼンスロボットの活用」「iPadが当たり前に存在する授業づくり」など特色のある取組が行われていた。（具体的な内容は研究成果報告書 pp. 37-62 を参照）

聞き取り調査は学校の同意の下で録音、録画したものを逐語でテキスト化し、口語の発言を要約した文章を作成したものをカテゴリー化した（KJ法では「ラベル集め」と呼ばれる）。その後、それぞれのカテゴリーを命名した（これはKJ法では「表札づくり」と呼ばれる）。（具体的な内容は研究成果報告書 pp. 64-73 を参照）

（３） 図解化（プロセスモデル）とガイドブックの作成

上記（２）で得られたカテゴリー（サブカテゴリーとして19件）についてKJ法のA型図解化により、カテゴリー間の関連づけを行った。作業は研究チームメンバーで協議しながら実施した。

KJ 法を参考とした A 型図解化の結果は、以下（図 1）のとおりとなった。

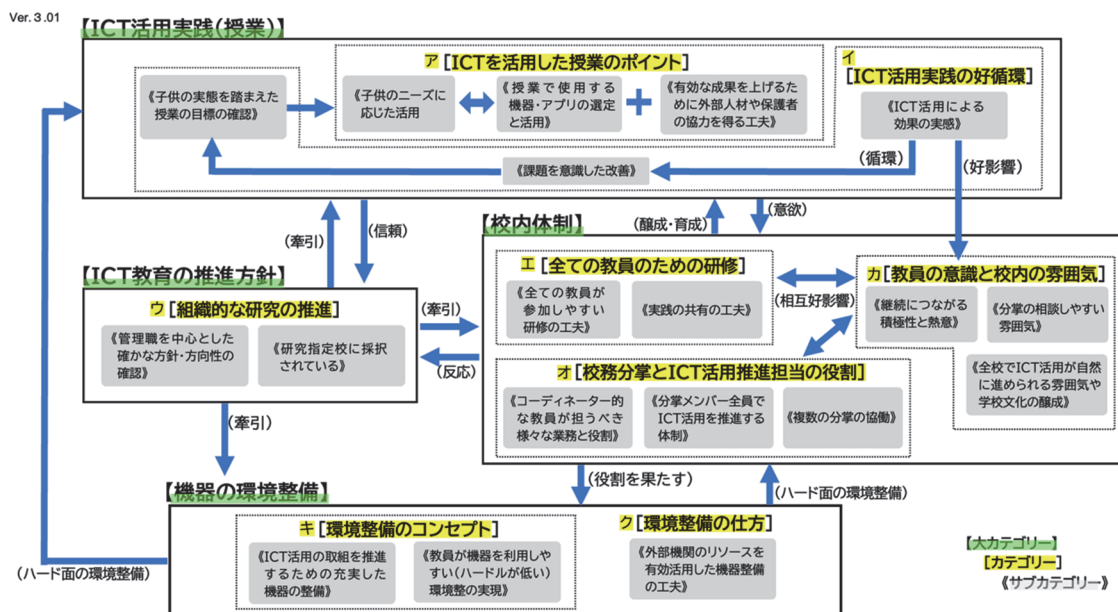


図 1 KJ 法を参考とした A 型図解化の結果（プロセスモデル）

上記のプロセスモデルについて、聞き取り調査の対象校 12 校から 23 名の参加による研究協議会を開催して、川喜田（1986）による衆目評価を実施した。その結果「所属校の学校の状況を振り返るものとなる」「今後に向けて、所属校に足りないものを洗い出すことができる」「校内体制の整備に活用していきたい」との活用可能性に関する評価があった。

これらの意見を踏まえて修正したプロセスモデルをもとにガイドブックを作成した。ガイドは『特別支援教育における ICT を活用した教育を推進するために 推進ガイド【特別支援学校編】』として、別冊の資料として掲載している。

【成果の活用】

本研究の成果物であるガイドブックは、学校の管理職、校内の ICT 活用を推進するリーダー的立場の教員の方を中心に活用していただき、自校ができているところ（長所、強み）、どちらともいえない、もしくはできていないところ（課題等）を把握することで、自校の ICT を活用した教育の現在の状況や、今後重点的に取り組む必要の存在を確認し、その具体的な方策、目指す姿を明らかにして、各学校の ICT 活用の推進、指導・支援の充実に活かせるように工夫している。

なお、ガイドブックにある推進マップとチェックリストは、都道府県教育委員会等が、管下の学校について、それぞれの強みや課題を把握できるツールでもあることから、ICT 活用推進のための指導助言や必要な施策を自治体で検討する際の参考として活用されることが考えられる。